

## 天声人語

人ととの出会いと同じく、本との出会いにも偶然のおもしろさがある。目当ての本を探して歩く図書館でばつたり。友人の本棚でばつたり。そして本屋さんの店先で、手招きする本がある▼大きな書店でなく「本や」という雰囲気を持つた小さな店が好きだと、詩人の長田弘さんが書いている。本の数は少なけれど構わない。「わたしは『本や』に本を探しにゆくのではない。なんとないけれど構わない。「わたしは『本や』に本の顔をみにゆく」だから▼小さい店だから、ほとんど全部の棚をのぞく。自分の関心の外にある本、予期しなかつた本がある。とくに夜、静かな店で「まだ知らない仲の本たちと親密に話をするのは、いいものだ」。そして1冊を買うのは、いいものだ。▼まちの小さな本屋は、とりわけ子どもたちにとって、知らない世界への入り口でもあった。作家の町田康さんが小中学生の頃を振り返って書いている。ひとりで書店に行き、新しい文庫本を手にすることで「頭のなかにおいて、どんどん遠いところに行くようになつたのである」▼そんな場所は残念ながら、減る一方のようだ。書店が地域に一つもない「書店ゼロ自治体」が増えていると記事にあつた。自治体や行政区の2割を超えるという。消えてしまった店を思い起こした方もおられるか▼ネットで頼めば自宅に届く。車で大型店に行けば話題の新刊が手に取れる。まちの本屋が減る理由は、本好きであるほど思い当たるかもしれない。豊かな出会いの場は何だろう。読書の秋を前に、考え込んでしまう。

2017・8・25